自著とその周辺

カラー図解　人体の正常構造と機能

総編集　坂井建雄・河原克雅

Ⅲ　消化管

河原克雅・佐々木克典　著

日本医事新報社
86頁
2000年
定価　5,200円
（全10巻縮刷版，2008年
定価18,000円）

この解剖生理学書は，人体を器官系にわけ，それぞれを肉眼解剖，組織構造，発生，機能生理の視点から統合的に説明したもので，10巻で人体全体を網羅したものである。私が担当したのは第３巻 消化管の肉眼解剖学，組織学の領域である。図はビジュアル系，文体は平易で，主な対象は医学生であるが，パラメデイカルの学生にも決して読みにくいものではない。内容はコアカリにも対応しており，ある意味では実践的な本でもある。

この解剖書はある程度出来上がった肉眼解剖の図に対しそれぞれの著者が説明を加え，図の不備な箇所を改め，足りない組織図などを補うというやり方で作られた。初めてビジュアルな図を見せられた時，とてもついていけないと思った。Gray や Spatheholz，Sobotta などの図に慣れしんだ人間にとっては極めて違和感を覚える図であった。しかし，１枚１枚見ていくと，一見稚拙そうに見えながら，案外痒いところまで書き上げている正確でレベルの高い図であることがわかり，ところどころ書き足しながら進める作業が実に楽しくなった。組織図は信州大の実習用のプレパラートから作成されたものが大半で，TEM 像も含め教室員の協力を得て完成した。

これは翻訳以外で私自ら執筆した最初の本だったので，その売れ行きが気にならなかったと言えばうそになる。発刊されてすぐ，たまたま東京に行く機会があり，神田の三省堂書店に立ち寄った。怖いもの見たさで，普通は足を運ばない医学書コナーに行き自分の本がどこにおいてあるか探してみた。足がすくんでしまった。なぜなら医書コナーの一番目立つところに飾ってあって，そこに最近出た良書などとコメントを記載したしゃれたなカードまでついていた。気恥ずかしさでいたたまれなくなりすぐにたち去ったが，このようなことは一生に一度あるかないかのことだから，写真を撮り記録しておくべきだったと後で深く後悔した。売れ行きは思いのほかよく，医事新報社のドル箱の一つになっていると聞いている。総編集の坂井建雄教授は，最近，人体観の歴史（岩波書店）という壮大な書籍を出版した。その第８章“第二次大戦後の解剖学書”でこのシリーズを取り上げ，多色による魅力的な図版，テーマを絞り込んだ見開き構成，第一線の研究者による解説により注目を集めているとこれまでの評価を的確にまとめている。

この本の最初に教室員が一同に会した一枚の写真が掲載されている。学会で，ある教授から，あれほど教室員はいるはずはない，サクラが混じっているだろうと言われた。それも事実で，自主研修で来ていた学生も教室員を装い写真に納まっている。ほぼ８年の歳月が流れて，この写真に載っている人たちのほとんどは教室を去りそれぞれの人生を歩まれている。時の流れは速く，そして無常である。彼ら一人ひとりがそれぞれの場で活躍し幸せであることを願わざるをえない。

この本は１冊5,200円でそれほど高価ではないが，10冊揃えると50,000円ほどになり，とても学生に勧められるものではない。しかし，2008年に10冊の縮刷版ができた。値段も18,000円とやや高いけれども，肉眼解剖学，組織学，生理学が合わさったものだと考えれば，それほど高価ではないかもしれない。最近，学生から求められれば，参考図書として勧めている。購入した学生から褒めてもらうことも多く，お世辞とは思いつつも顔がほころぶが，この文章を読んでおられる読者には直接役に立つ本ではないだろう。せいぜい，もう一度解剖学や組織学を振り返ってみようかという奇特な方にお勧めできる程度である。どちらかといえば，ご子息や知人のお子さんの合格祝いあるいはメモリーにプレゼントしていただければ幸いである。

（信州大学医学部組織発生学講座　佐々木克典）